



トバース収容所跡と記念碑
1994年8月筆者撮影

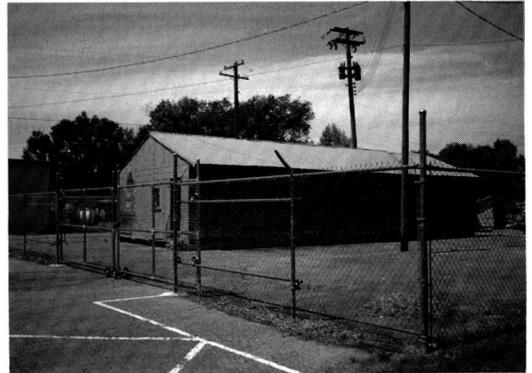
デン (Ogden), ソルトレイクシティ (Salt Lake City) を通過して3日がかりで、デルタへ到着した。ここからバスで収容所へ運ばれたのである。

収容所にはいって先ず収容者がしたことは、盗みであった。住居として割り当てられたバラックには、軍隊用ベッドのみが備えられて、家具はなかった。人びとは、闇に紛れて資材置き場へ出かけては、目ぼしい材木を物色して持ち帰り、テーブルや椅子などを作った。いく棟かの管理棟に灯りがともっている以外、収容所の夜は真の闇であった。人びとは排水管の通る深い溝に身をひそめ、見張り兵の目を盗んで材木に近づいた。来るべき冬を前に、盗みは犯罪ではなく、必要に迫られた行為であり、母親たちも率先してこれに加わった。“...worried mothers were the most skillful of all.”⁽⁴⁾ とオークボは述べている。

住居の各バラックには6室があり、12のバラックが集まって1ブロックを構成し、収容所全体は36ブロックに分かれていた。その他の施設は保育園3、小学校2、中学・高校1に加えてベッド数128の病院があった。水は3ヵ所の井戸からくみ上げ、50万ガロンの貯水タンクにたくわえて使った。人びとが悩まされたのは、砂嵐と下水道の不備から生じた悪臭、蚊などの虫の襲来であった。人びとは砂嵐を防ぐため、灌漑用水路を作って空き地を畑にしたり、バラックの間に砂利を敷いて、土が舞い上がるのを阻止しようとしたが無駄だった。汚水処理場は、収容所から西へ半マイルの所にあったが、悪臭が風に乗っ

て収容所全体に漂ったという。また、夏には蚊その他の虫の大群の飛来に悩まされ、網戸が支給されて室内への侵入は防げたものの、一步外へ出ると蚊の大群が待ち構えていた。“In the summer in Topaz we had a choice of being eaten by mosquitoes outdoors or suffocating with the heat indoors.”⁽⁵⁾ というオークボのことは通り、外では蚊、室内では暑さに悩まされた劣悪な環境であった。多くの収容者がサンフランシスコ湾地域の出身で、夏の涼しさと都会生活に慣れていたので、このような所で暮らすことは難しかった。

このような環境でも人びとは次第に楽しみを創り出していく。さまざまな趣味の講座が開かれたり、食堂や屋外に舞台を作って演芸が披露されたのは他の収容所と同様であった。ここで女性たちに人気のある趣味は貝細工であった。荒野はかつて湖底であったため、長さが5ミリから1センチくらいの小さな貝があり、人びとは土をふるいにかけて貝を選り分け、これにマニキュア用のエナメルを塗って色をつけ、さまざまな細工物を作った。



Great Basin Museum (Delta) に
保存されている収容所の建物
1994年8月筆者撮影

デルタの町の Great Basin Museum には当時の収容者が作った美しいパンジーの花のコサージュが、今も色あざやかなまま展示されている。

この収容所ではとくに日本語による成人教育が熱心に行なわれた。監督は元ユタ大学教授のペイン博士であった。とくに人気があったのは英語講座で、15才から79才までの人びとが参加した。彼らはブロークンでない正しい英語を話したいと切望していた。一世は、自分の子供に英語で手紙を書きたい。婦米二世はアメリカ社会で役

立つ人になりたいというのが、受講の最大の理由であった。一世は「三步下がって師の影を踏まず」という日本の作法を守り、若い二世の教師に丁寧な態度で接したため、教師のほうが戸惑ったというエピソードもあった。

1943年2月15日、忠誠登録が開始されたが特別の混乱はなく、25日の終了までに登録すべき人の85%にあたる6,100名が登録した。日本送還を希望した者はわずかに36名で、112名が志願兵の登録を行なった。不忠誠となってトゥーリレイク隔離収容所へ送られた者は1,466名であった。収容者が忠誠登録の際に思い悩んだことは、他の収容所と同様であったが、トゥーリレイク収容所のように暴力による登録阻止などはなかった。唯一の事件は、登録が終了してしばらくした4月11日に起こった「若狭事件」である。収容所では柵に近づくことは禁じられていたが、収容者のひとり63才の一世ジェームス・ハッキ・ワカサ⁽⁴⁾は、夕闇の濃くなった午後7時半頃柵に近づき、4度の注意も聞かずになお柵へ向かったところを歩哨に射殺された。彼は逃亡を企てたと報道されたが、野の花を摘もうと柵の外へ手を伸ばしたなど諸説があった。相手に危害を加えるとは思えない無力な老人を殺したことは事実で、兵士へ非難の声があがった。しかし、軍法会議で兵士は無罪となった。3月19日、ワカサ老人の葬儀が行なわれたが暴力的な抗議行動は起こらず、人びとは怒りをこめて、しかし静かに抗議した。これを契機に当局は譲歩し、4月21日になると兵士による日中の見張りが廃止された。

収容者は植物が育たないアルカリ土壌に農園を作って成功し、丈夫な木を植えて砂嵐を防ぐ努力をした。冬は石炭不足に悩まされたが、スケートリンクを作って戸外で楽しみ、週2回の「肉なしデー」に耐えて、クリスマスや正月を七面鳥や雑煮の特別料理で祝うことを忘れなかった。外部労働に出る者、戦場へ赴く者、大学へ去っていく者、戦死して無言の帰宅をする者など悲喜こもごものうちに、収容所は1945年10月31日に閉鎖された。

2. *Topaz Times* と『トバース時報』

WRAの監理下で発行された収容所の英字新聞*Topaz Times*は、1942年9月17日に創刊された。謄写版刷りで火・木・土の週3回発行された。他の収容所の新聞と同様、WRAからのニュースおよび通達が掲載された。

*Topaz Times*の特徴は、土曜版が充実している点にあ

る。コミュニティニュース、宗教、教育、スポーツ関係の記事、ベニー・ノボリの6コマ漫画などがあり、わずかながら詩と短編小説も載っている。平日の編集は、ダニエル・オータ、土曜版は詩人のイウォ・カワカミ⁽⁵⁾が担当した。9月18日にタンフォールンから到着したミネ・オークボとヨシコ・ウチダ⁽⁶⁾はそれぞれの著書のなかで、収容所へのパスのなかで創刊号が配布されたと書いている。ウチダは、すでに先発隊の人びとがいて新聞を発行できる体制が整っていると知って心強く思い、オークボは、“Topaz, the Jewel of the Desert”という見出しに思わず吹き出してしまったという。現実とはあまりにもかけ離れた表現であったが、編集者たちはせめてこのような見出しをかかげて、自らを励ましたのかもしれない。オークボはのちにこの収容所の文芸活動に積極的に参加するようになる。

一方、日本語版は少し遅れて10月29日から『トバース時報』として発行され、1944年から『トバース新聞』と名称が変わった。ここでWRA関係の記事の他にもっとも力を注いでいるのは宗教である。キリスト教および仏教の聖職者による講話はほとんど毎日載っている。京極逸蔵の「聞光録」⁽⁷⁾は短歌を織り混ぜた随筆だが、きわめて教訓的な色彩が濃い。聖職者は、「明日に向かって行きよ」⁽⁸⁾などのテーマを掲げて、残してきた「物」への執着を捨てて前向きに生きることの大切さを説いている。また、聖書の「汝盗む勿れ」を引用し、板きれや石炭を盗むことを戒めている。このような記事は収容所の秩序を保つために欠かせないものであった。時折挿入されている絵は小圃千浦⁽⁹⁾が担当し、雑誌で活躍したミネ・オークボとはまったく異なる水墨画風の絵を描いている。

『トバース時報』は、所内の秩序の維持に貢献するほか、日本語を理解できる一世および婦米二世の「アメリカ化」を促進する役目も果たしていた。アメリカ史のなかのエピソードを紹介する「米国史実小話」、いわゆる偉人伝風な「米国人の尊敬する米国人」から食事の作法までアメリカ人に欠かせない教養を身につけるための啓蒙記事が掲載された。これは前に述べた成人教育の講座を紙上で再現したものである。講座はアメリカに来て以来学ぶ機会に恵まれず、ただひたすらに労働に明け暮れてきた一世と、アメリカ生活の経験の少ない婦米二世を対象としたもので、所内でたいへん人気があったという。

忠誠登録の結果について、他の収容所の新聞紙上で議

論されることはなかったが、『トパーズ時報』は例外であった。1943年3月11日、志願兵の記事のあとに一世から「一老一世の言／同胞よ大和民族の本領を發揮せよ」と題する次のような投書が掲載された。

「……母国米國ノ為報國ノ念ニ燃エ、我民族ノ美風、愛國ノ精神ヲ表現シ奮然起チ米國軍ニ加入志願セシモノアルヲ知ル。是レゾ實ニ八紘一字ノ大義ニ生き後世ニ吾ケ民族ノ名価ヲ発揚スルモノナリ。希クハ回顧セヨ立退直後日本帰還ヲ請願セシ者、實ニ三百ヲ算ス。而レドモ日本政府ハ僅カニ、三十余人ノ帰還ヲ快諾セシニ過ぎズヤ。大多数ハ既ニ日本ニスラ忘却セラレシヲ知ラズヤ」⁽³²⁾

他の収容所新聞の日本語版が、かなり親日的な姿勢であったのに対し、ここでは、日系人は合衆国に忠誠を尽くし、従軍して戦うべきであるとして、忠誠登録で不忠誠を表明した者を非難する投書を載せている。そして、日本政府はすでに日系人のことなど忘れ去っているので、今さら日本政府に忠実である必要はないと述べて、不忠誠の人びとが信奉しているのは美化した日本の幻影にすぎないとしている。これに対し、帰米二世のカール・アキヤ⁽³³⁾とジェームズ・オキは、アメリカは民主主義の国であるから忠誠でも不忠誠でも等しく認めねばならない、不忠誠者への非難は間違っていると反論した⁽³⁴⁾。登録についてこのような議論は他の新聞には見られず、この新聞の編集姿勢が双方に平等であったことを示している。

トパーズにはトシオ・モリ⁽³⁵⁾、イワオ・カワカミ⁽³⁶⁾とその夫人トヨ・スエモト⁽³⁷⁾など戦前から文芸活動に係わっていた二世がいたため、英語の作品が多かった。それらは*Topaz Times*紙上に掲載されていたが、1942年12月、英文誌*Trek*が発行されると、発表の場はこちらへ移った。新聞に載ったトシオ・モリの作品は“Akira Muto, American”および“A Sketch”の2作である。前者は1942年12月5日付、後者は翌年の元旦に掲載された。

アキラ・ムトーはオークランドからトパーズへ送られた9才の少年である。彼は小学校で友人から「ボニイ」と呼ばれて楽しく暮らしていた。しかしトパーズでは、もはや彼を「ボニイ」と呼んでくれる友達はいない。「ボニイ」は彼の楽しい生活の象徴であったが、収容所でその名を失ったことは、自分の本来の生活をなくしてしまったことを意味した。彼は母にオークランドへ帰

りたいとせがむが、母はどうすることもできず、ただ黙々と家事を続けるだけであった。モリは9才の少年の目を通して、収容所の日常を描くことで、強制収容により日系人が失ったものの大きさを告発している。

もうひとつの短編“A Sketch”は、収容所の柵を作る作業を見ている2人の男の会話である。ひとり、柵を自分たちを閉じ込めるものとし、自由な気分を味わいたいとして、柵を否定する。一方の男は、柵は自分たちを閉じ込めるだけでなく、保護する役割も果たしているとして、柵を肯定する。誰もが柵の中で暮らしたいとは思わないが、モリは自分が収容されたことを正当化しようと、苦しい「外界からの保護」論を展開したのである。このような創作態度は、彼が「一部のアメリカ人の暴力から日系人を守るため、1カ所に集めて収容する」というWRAの方針の代弁者になったかのように見えるが、実は民主主義の国では起こりえない強制収容という暴挙の犠牲になったモリが、自分を納得させるために行なった苦しい選択であった。前者では、強制収容を告発し、後者では肯定するというのも、揺れ動くモリ自身の気持を表しているといえよう。

短詩形文学は、短歌のトバズ短歌会、俳句のトバズ吟社、川柳のトバズ川柳社があったが、この収容所の特色は自由律俳句の「ポビイの会」であった。自由律俳句は1910年代に日本で始まった新しい俳句運動の結果生まれたもので、季節を無視した自由表現を特色としていた。これがアメリカへも渡り、日本の荻原井泉水⁽³⁸⁾を師として『屑雲』などを講読して学ぶ人がいたようである。これらの作品は、1944年1月から月にほぼ1回設けられた文芸欄に掲載されている。

親米、親日に偏らない姿勢をとっていた。『トパーズ時報』であったが、終戦の8月15日には広告欄に「一切を黙し只管皇室の御安泰と国民の再生を祈る一邦文欄同人」と書かれている。これは、日本語版を支えてきた人びとの偽らざる気持であったといえよう。日本人としての心情をあらわにした表現は、『トパーズ時報』ではめづらしいことで、しかもこれが最初で最後であった。一方の*Topaz Times*の見出しは、“Japan Surrenders / Center Closing Set”で、収容所の閉鎖に重点をおいて報道し、平静を保っている。新聞は日本語版ともに終戦の半月後、8月31日に終刊となった。

3. 英文誌 *Trek* および *All Aboard*

(1) *Trek* とその内容

1942年12月, Reports Division の特別休日用出版物として総合雑誌 *Trek* が発行された。編集はジム・ヤマダ, タロー・カタヤマ⁽⁹⁾ などの若い二世で, これに新進の画家としてすでに認められていたミネ・オークボが加わった。*Trek* は移民たちが移動する旅を示すことばであるが, カリフォルニアからユタへ送られてきた収容者の旅という意味で名付けられたという。第1号の表紙はオークボの作品で, 収容所のクリスマス風景を描いたものである。これはクリスマスの朝, 収容者に配付された。

編集者たちは第1号が好評であったことに勇気を得て, 翌年の2月に第2号を, 6月には第3号を発行した。編集者が再定住のために外部へ出るという事情もあって, 3号で終刊となった。日本語の雑誌は一世が多く係わっていたため, 収容所が閉鎖されるまで留まった人が多くいて, 長期の発行が可能であったが, 二世だけで運営されていたこの雑誌は, 1944年の半ばから収容所を出る二世が多く, 継続しての発行は困難だったようである。3号ともオークボの挿絵が随所にちりばめられている。

“.....a well-balanced diet of art and literature”⁽²⁰⁾ と編集者が書いているように, 文と絵のバランスがよく, 読みやすい雑誌となっている。

毎号とも収容所の現状報告, 衣服や料理など収容所生活に役立つ知識, トバース周辺の歴史や地理が掲載され, のちには再定住のための情報もあることから, 文学中心ではなく, やはり身近な情報を伝達することが第1の目的であることがわかる。そのなかに短編小説, 詩がちりばめられている。他の収容所の日本語雑誌と違う点は, 外部からの非日系人による寄稿である。それぞれの号に Frank Beckwith Sr. の連載 “Landmarks of Pahvant Valley” (第1号), “Escalante’s Journey” (第2号) “Trilobites of Antelope Serings” (第3号) がある。Beckwith はデルタの町に30年以上住んでいる新聞社主⁽²¹⁾ で, 化石および原住民の伝承の蒐集家であった。たぶん彼は公平な広い心の持主で, 日系人に同情し, 自分の持つ知識を何らかの形で役立てたいと考えたようである。記事には地図や化石や絵も添えてあり分かりやすい。無味乾燥な砂漠の収容所に失望したが, この記事を読んで化石への興味をかきたてられた人も多かったようである。のちに柵の外へのピクニックなどが許可されると, 化石集めが人気のある趣味となったのは, この記事

の影響であろう。

マリイ・キョウゴクによる “A la Mode” は, 各号に連載されているが, 衣服や食事など家事に関する啓蒙的な内容である。たとえば, 立ち退きに際してもジーンズとシャツした持って来なかったという人も, 正装をする機会があれば通信販売で衣服を買うことになるが, その際のアドバイスが書かれている。これらは, 日系人の生活の「アメリカ化」を奨励する目的で書かれていることが明らかである。

Trek は大体同じような構成をもっているが, 第1号は収容所の全貌を明らかにしており, 第2号は日系人を迎える収容所の外の情報に重点が置かれ, 第3号は終刊号らしく収容所が1年の間にどのような変化をとげたかがまとめられている。これらが各号の特徴である。編集スタッフは, 初めのうちは強制収容に対する怒りをあらわにしていたが, 次第に興奮がおさまり, 収容所生活の暗い部分だけでなく明るい面も見られるようになったという。雑誌を終わるにあたって, スタッフのひとりはい, “...this end serves only as a beginning of a new chapter in American history.”⁽²²⁾ と述べて, 収容所から出て, 自分たちの手でアメリカの歴史の新しい章を開こうと意気込んでいる。たしかにこれらの若い日系二世たちは, ここから戦場に赴いて日系人へのアメリカ世論を良い方向へ変えていくなど, 徐々にではあるが歴史の流れを変える役目を果たした。

(2) *All Aboard* とその内容

All Aboard は1944年の春に発行された謄写版刷り, 約50ページの総合誌であるが, この1冊のみで終わっているため, *Trek* と異なりトバース収容所の記録から見落とされていることが多い。*Trek* が1943年6月に最終号となって以来ほぼ1年間, 出版物はなかった。そのブランドを埋めるように出されたのが, この雑誌である。編集にはトシオ・モリが加わっている。*Trek* で主要な役割を果たしていたタロー・カタヤマは, すでに兵士となって収容所を去っていた。独特の画風で収容所生活をするべく告発する挿絵を載せていたミネ・オークボもニューヨークへ行った。このような人びとの移動にともない, 編集メンバーの顔ぶれは *Trek* とは異なっている。

内容は, 1943年までの収容所の年表, 収容所生活のスケッチ, 短編小説, 詩などほぼ *Trek* と同様である。12才の少年少女の作文も掲載されている。挿絵はオークボに代ってマサオ・タブキはか数名が担当している。トバース

ズでは成人教育が重視されていたが、この雑誌でもトヨ・スエモトが詩のほか“Mr. Mrs. Issei”と題して収容者のアメリカ化について書いている。日系人は社会の主流派である白人から差別された結果、同族のコミュニティを作ってかたまって暮らしてきた。一世は帰化不能外国人とされていたため、日本との結びつきが強くなるのも当然である。アメリカ社会に同化していない一世の状況を是正するために行なわれたのが、成人教育である。これは正しい英語と習慣を身につけることを目的とした。差別はアメリカ人が日系人を理解していないことに起因するので、とくに一世は正しい英語で自分を主張し、理解させることが重要であるとスエモトは主張する。収容前は一世が日系社会の主導権を握り、二世はまだ若く、発言権もなかった。しかし収容所内では、逆に二世が一世の今後を考えて、教育プログラムを企画するほどに成長したことを示している。

ハツエ・エガミの“Wartime Diary”は、トゥレアリ仮収容所の詳細な日記である。1943年5月、カリフォルニア州パサデナから家族6人は、住み慣れた家をあとにする。“Since yesterday we Japanese have ceased to be human beings. We are numbers, we are things. We are no longer Egamis, but the number 23324.⁽²³⁾”もはや人間ではなく23324番となったエガミ家の人びとを含む300名の“dead evacuees”は車で11時間かかって、仮収容所へ送られる。そこは競馬場を一時的に改造した所であった。ハツエは、これまで十分に文明生活をしてきたのだから、原始的な生活を体験するのも面白いと考えると、勇気が湧いてきたという。渡米して厳しい労働に明け暮れてきた老人たちは、粗末な食事でも黙々と食べている。一方で若者たちは、自暴自棄になって不平を言い、わざと器物をこわしたり、混乱を起こす。しかし、ハツエは、公平で正しい態度を貫こうと努力し、Social Welfare Divisionで働くことにする。

立ち退きの日、隣に住む白人がココアやコーヒーをもってきて、涙を流しながら別れの挨拶をするとき、ハツエは人種を越えた人の優しさに感動する。駅では教会の白人たちがサンドイッチなどの朝食を配っているが、そこでかいがいしく奉仕している白人の少女と自分を比べ、少女を羨ましく思う。収容所には監視塔があり、歩哨が立っているが、兵士も家を遠く離れて淋しいだろうと自分の立場も忘れて同情する。“While nation fights

and man kills man to torment and suffer, how peaceful Nature is.⁽²⁴⁾”彼女は野の花に、砂漠のグロテスクなサボテンにさえ自然の美しさを見出し、メスホールで黙って食物を口を運ぶ老人たちを優しく見守る。作者は女性らしいこまやかな目で、苦しい立ち退きの旅のなかにも、心を動かすさまざまな場面があったことを伝えている。

All Aboardが1号で終わったのは、編集者たちが収容所を去ったためであろう。のちに述べるトシオ・モリの短編も含め、かなり充実した内容の雑誌であった。

(3) 雑誌の中のトシオ・モリの短編小説

両方の雑誌すべてに短編小説を載せているのは、トシオ・モリである。彼は二世のなかでもっともよく知られた作家である。1910年カリフォルニア州オークランドに生れたモリは、生涯サン・レアンドロ (San Leandro) で苗木園を営んで暮らした。文学に興味を持った彼は、家族経営の苗木園で1日10時間以上の労働に従事しながら、夜の4時間を文学を勉強する時間にあて、睡眠時間を割いて創作に励んだ。作品を雑誌社に送り続けた結果、1938年ようやくCoast誌に採用された。その結果ウィリアム・サロイアン (William Saroyan) に認められ、短編集Yokohama, Californiaが1942年に出版される運びとなった。しかしその喜びも束の間、戦争が勃発して出版は断念せざるをえなくなった。長い間の努力がまさに実ろうとした矢先である。

タンフォーラン仮収容所を経てトパーズにきたモリは、ここでも旺盛な創作活動を続けた。モリはのちに、労働から解放された収容所時代は、もっとも多くの時間を創作のために費やすことができたと言っている。彼に文学のための多くの時間を提供したのが収容所であったとは、まことに皮肉なことであった。

Trek第1号には“Two Sketches”と題して“Trees”および“Topaz Sation”が掲載されている。いずれも1ページ半ほどの短い作品である。“Trees”はハシモトとフクシマのふたりの一世の会話から成っている。ふたりは長年の親しい友人だが、ハシモトは盆栽⁽²⁵⁾が趣味で、庭に置いた松の盆栽を見てまわるのを朝の日課としている。ハシモトはこの趣味があるために、大変幸せそうに見える。一方、フクシマは運悪くかなりの財産を失った矢先で、打ちのめされていた。そこで彼は、ハシモトが幸福なのは、盆栽を見ることに秘密があるのだと推測

し、木のなかに何が見えるのか教えてくれと頼む。しかし、ハシモトはその問いには答えず、人は行動によって暑くもなり、寒くもなる、自分の意味する暑さと寒さは木のなかにあると言う。フクシマはハシモトの幸福の秘密を教えてもらい、自分ももう1度やり直して財産を取り戻したいという。しかし、ハシモトは自分はただ木を見るだけで、人に教えるような特別なことは何もないと言ひ張る。がっかりしたフクシマは怒って去って行く。

ハシモトの語ることばには禅問答のような響きがあり、連続性がなく、きわめて難解である。読者は、盆栽を育てることによって得られる幸福感や、暑さ寒さということばで抽象的に語られる人生をハシモトがどのように関連づけるかと期待して読んでいくと、少なからず失望するであろう。この短編の目的は対照的な性格をもつたりの一世を登場させて、その考え方の違いを際立たせ、人間を描くことにある。モリはのちにインタヴューのなかで、多くの一世代や二世の姿を描いて、一般のアメリカ人に日系人を理解させるのが自分の文学の目的のひとつであると述べている。この短編もその試みの一つであろう。ハシモトはじっくりと時間をかけて考え、行動する人物である。忍耐強くなければ盆栽など作れない。それに対してフクシマは、気が短く、効率よく行動しようとする。つまりハシモトの幸せの秘密を聞き出して、それを真似すれば自分も幸せになれるのだと安易に考えている。モリはこの短編で、良い盆栽を作るためには、長い時間と忍耐を要すると説き、現在の収容所生活にも耐えぬくことが必要であると暗に示している。モリは読者がこの短編に刺激を受けて、何かを考えることを期待している。自分の利己主義に気づかず、ハシモトから満足すべき答えが得られなかったとして怒るフクシマの態度は、目先のことにばかり気をとられている収容者への警告でもある。もっと長い目で人生を見よう、小さな盆栽の松でも数十年を経ているのだと言外に暗示しているのである。

一方の“Topaz Station”は、“Topaz, the city...”ということばで始る段落3つで構成されており、トパーズ収容所はいかなる所かというモリの定義が書かれている。モリは“...a station...a stopping off place on the way to progress as good Americans for a better America.”⁽²⁸⁾と述べて、人生を旅、トパーズ収容所を駅にたとえ、進歩の途上にある日系人が途中下車した場所としている。日本人はアメリカに渡って以来、

この時点では50年ほどになるが、人種偏見というアメリカ国内の事情もあって完全にアメリカ化していたわけではない。モリの言う「進歩」とは「アメリカに忠誠」を意味する。しかしこのなかでモリは、日系人が「よきアメリカ人」となったときは、アメリカ自身も“better”つまり、現状よりもよくなければならないとしている。“Topaz is the city of many brothers, sisters and parents whose sons are in the US Army. The city where the people follow the progress of their soldier sons.”⁽²⁹⁾ モリは、強制収容所のなかからも息子を戦場に送っている日系人の矛盾した立場を書くのを忘れていない、日系人とくに一世がアメリカの価値基準を受け入れ、アメリカに忠誠を尽くすことは「進歩」であることをモリは否定していないが、そのためにはアメリカの社会も変わらねばならない、とモリは主張する。

*Trek*第2号の“Tomorrow is Coming, Children”はオークボの挿絵入り、「子供たちよ 明日という日はきっと来ますよ」という題でマリイ・キョウゴク和訳がついている。3号を通じて日本語が使われているのはこの翻訳のみである。たぶん一世に向けたものであろう。これは、収容所のなかで一世代のおばあさんが三世の孫たちに語る形式をとっている。おばあさんは若いとき、日本の村からたぶん写真結婚で、サンフランシスコへ嫁ぐ。しかしそこで彼女を待ち受けていたのは貧乏暮らし、人種差別という厳しい現実であった。夢に見たアメリカ生活とはあまりにも違う惨めな暮らしに戸惑いながらも、子供を生み育て、ことばが通じなくてもアメリカ人の友人も得て、次第にアメリカに根を下ろしていく。しかし日米戦争が勃発し、おばあさんは家族や孫たちとともに収容所へ送られる。彼女はカリフォルニアでの生活を懐かしむ孫たちに「明日はきっと来る」と言って励ます。

ここに登場するおばあさんはたぶんモリ自身の母をモデルにしたのであろう。おばあさんは、法律上は帰化不能外国人であったが、長年のアメリカ生活で自分もはや日本人ではなくアメリカ人だと考えていた。そして戦争によってどちらかをとるかはっきりと決心がついたと語る。モリは勤勉、正直かつアメリカの民主主義を信じている典型的な一世を描くことで、このような善良な人びとを強制収容したアメリカの誤りを静かに告発している。淡々とした語り口が、声高な抗議よりも一層の効果をあげている。この作品はのちに中編小説に発展し、1970

年代に *Woman from Hiroshima* として出版された。

Trek の第 3 号の “One Happy Family” はかつて幸せだった家族の物語である。母と 7 才のベンの家に手紙が配達された。それは姿を消して久しい父からの手紙であった。ベンは母の表情から、良い知らせではないと感じる。母はベんに、父は仕事で遠くへ行っており、しばらく帰れないが、良い子にして待っていなさいと書いてあると言う。ベンはそれが嘘ではないかと疑い、父は生きてると確信しながらも、不安になって父は死んだのかと尋ねる。学校で年長の少年たちが彼をジャップと呼んで家まで追いかけて来た日米開戦の日から、自分の家庭が以前とは違ってしまったことは、幼いベンにも理解できた。彼は父がいなくなった理由をさまざまに思いめぐらして母に問いかける。父はアメリカにとって悪い人間だから拘留されたのか。ベンはただ、早く世の中が元通りになって父が戻ってくれたらと願うだけであった。

戦争によって父を奪われた家庭を幼い息子の目から見るという点で、この短編はサロイアンの *Human Comedy* とよく似ている。ベンの父はたぶん、日系社会の指導者として開戦直後に留置所へ送られたのかもしれない。その帰りをじっと待つ家族だが、母は息子に “a good fighting American boy” になれと言う。息子は善良であるばかりでなく「闘う」アメリカ人となって、日系人が不当に苦しむことのない社会を作ってほしいとの願いが、この母のことばにこめられている。

All Aboard に掲載されたモリの唯一の作品は短編 “The Travelers” である。アメリカに忠誠を誓い、収容所を出ることを許可された 9 人は、バスにゆられてデルタの町へ行く。この駅で汽車を待つ 1 時間半ほどのあいだに交わす会話を中心に、人間模様が描かれている。カンザスシティへ行く母娘は、一世の母が家内労働をしながら娘を学校へやるという。ミシシッピ州のシェルビー墓地へ行く兵士と見送りの母、カリフォルニアでドライブインマーケットを経営していた男は仕事のチャンス求めてニューヨークを目指す。若い 2 人の娘は高校を卒業して家事手伝いをしていたが、ひとりはシカゴでステノグラファーの職に就き、もうひとりはフィラデルフィアで結婚することになっている。ウィスコンシン大学へ行く 18 才位の男、カリフォルニアで農業をやっていた男は安い土地が買えるという友人の誘いで、オハイオ州アクロンへ行く。

これらの人びとは 2 人の母親を除き、すべてが若い二

世で、未知の世界へ出発する不安もあるが、収容所から出られるという喜びの方が大きく、希望に満ちている。兵士はシカゴへ行く娘に魅力を感じ、“Let’s travel through life together for a while.” と言ってみたく衝動にかられるが、そのことばを飲み込んでしまう。モリは “Topaz Station” と同様に人生に旅にたとえ、その駅に集る人びとを、日系社会の縮図として描いた。

トパーズの雑誌に掲載されたモリの短編は以上の 5 編である。“Trees” のほかは直接日系人と戦争、収容所を扱った作品である。モリは当然、監理当局を意識して書いている。したがって、内容は穏やかで、たとえ現在は収容されていても、アメリカの民主主義は再び正しい姿にたち戻り、日系人が正しく評価される日が来るであろうと暗示している。収容所の生活はモリに、それまでは考えもしなかった忠誠の問題を考えさせた。自分は当然アメリカ人であると思っていた彼は、収容されてはじめて、自分が二世でありながら忠誠の問題に直面せざるをえない現実を知る。収容所の生活は彼の文学にさらに深みを与えたといえよう。

おわりに

トパーズ収容所には、戦前から文学活動をしていた若い二世が収容されており、英語雑誌が創られた。その中心となったのは日系人作家の先駆者トシオ・モリである。彼は収容所でありあまる時間を活用して創作に励み、いくつかの佳作を生み出した。彼は戦後 1949 年になって、戦前に出す予定だが開戦で果せなかった *Yokohama, California* をようやく出版したとき、収容所で書いた “Tomorrow is Coming” および “The Trees” を加えた。“Tomorrow is Coming” はその後加筆され中編小説 *Woman from Hiroshima* となった。1960 年後半の「ブラックパワー運動」に刺激されたアジア系アメリカ人の「イエローパワー運動」が 1970 年代に起こると、日系アメリカ文学の作品を発掘する三世、四世の支援によってようやく *Woman from Hiroshima* が出版された。

画家のミネ・オークボもまた、戦後収容所の生活を収容者の視点から克明に描いた画文集 *Citizen 13660* を出版、日系人ばかりでなく他のアメリカ人からも注目され、他に先駆けて強制収容の実態を多くの人に知らせる役目を果たした。イワオ・カミカミ、トヨ・スエモト、タロー・カタヤマなどはすでに 1930 年代から創作を発表していた

が、戦後も継続して収容所の体験をテーマにした随筆や詩を新聞などに発表した。ヨシコ・ウチダは収容所では執筆をしていないが、戦後トバース収容所に関する少年少女向けの3部作 *Journey to Topaz*, *Desert Exile*, *Journey Home* を書いた。他の収容所では日本語文学が盛んであったが、トバースは二世による英語文学が花開き、彼らの活動は、戦後の二世の英語文学の基礎となった。

註

- 1) 順に『東京家政大学紀要』第27集、第29集、第33集、第34集に掲載。
- 2) 1776年の秋にサンタフェ（現在のニューメキシコ州都）のカトリック神父エスカランテ（Father Escalante）がはじめてこの地方（Millard County）を探検した。これは神父の日記に書かれていたことばである。
- 3) 1912年、カリフォルニア州リヴァサイド生れの二世。UCバークレイ校修士課程終了。画家として活躍、多くの賞を受ける。現在はニューヨーク在住。
- 4) Okubo, Mine, *Citizen 13660*, (Arno Pless, New York, 1978) p.137.
- 5) 同書, p.189.
- 6) 若狭初秋、慶応義塾出身で、1903年に渡米、独身。ウィスコンシン大学大学院終了。当時、日本人は高学歴に相応しい職業に就くことができなかったため、収容前はサンフランシスコで料理人をしていた。
- 7) JAACL（全米日系アメリカ市民協会）の機関紙 *Pacific Citizen* の初代編集長。 *Nichibei Times* のスポーツ欄の編集など50年以上もの間、日系新聞に携わり、紙上に英詩を発表。
- 8) (1922-1992年) カリフォルニア州アラメダ市生れの二世の児童文学作家。UCバークレイ校卒。日系アメリカ人をテーマにした29冊の著書がある。
- 9) 『トバース時報』1943年9月25日付。
- 10) 後藤太郎、「明日のために生きよ」、『トバース時報』1942年11月28日付。
- 11) おばた・ちうら（1885-1975年）仙台市生れの一世。1903年にカリフォルニアへ。新聞の挿絵画家、デザイナーとして働き、1932年UCバークレイ美術学科の講師となる。1954年助教授で退職。著書：*Sumie* (1967), *Through Japan with Brush and Ink* (1968)。
- 12) 『トバース時報』1943年3月11日付。
- 13) Kari秋谷一郎、1909年、サンフランシスコ生れの帰米二世、15年間日本で生活し、関西学院専門部（旧制）卒業。戦前にサンフランシスコで反ファシズム運動に参加。収容所を出てからは、OSS（米国戦略事務局）で働く。現在ニューヨーク在住。
- 14) 『トバース時報』1943年3月16日付。
- 15) (1910-1980年) カリフォルニア州オークランド生れの二世。小説家として作品はさまざまな雑誌、新聞に掲載された。Best American Short Stories of 1943を含む多くの賞を受ける。 *Yokohama, California* (1949), *Woman from Hiroshima* (1978), *The Chauvinist* (1979) などの作品がある。
- 16) (1907-1979年) カリフォルニア州バークレイ生れの二世。JAACL（全米日系アメリカ市民協会）の機関誌 *Pacific Citizen* の初代編集長。 *Nichibei Times* のスポーツ欄の編集など50年以上もの間、日系新聞に携わり、紙上に英詩を発表。
- 17) 1916年カリフォルニア州オロヴィル生れの二世。イワオ・カワカミ夫人。幼いときから詩作をはじめ、17才のとき、西海岸地方の二世作家の文学活動に参加、新聞紙上に英詩を発表する。とくにサンフランシスコの『北米朝日』、シアトルの *Courier* 紙で活躍。
- 18) おぎわら・せいせんすい（1884-1976年）東京生れ、東京帝国大学卒。河東碧梧桐の新傾向俳句運動に共鳴し、のちに自由律俳句のリーダーとなる。1911年『層雲』を主宰。句州に『原泉』（1960）、『大江』（1971）がある。
- 19) 1913年、ユタ州オグデン生れの二世。ユタ大学卒。戦前はサンフランシスコ湾地方で日系新聞社に勤務。1943-1945年 第442 連隊戦闘部隊に従軍。新聞に短編小説などを発表。現在はオークランド在住。
- 20) *Trek* 第3号, p.37
- 21) *Millard County Chronicle* を発行。彼の蒐集品の1部はデルタのGreat Basin Museumに陳列されている。
- 22) *Trek* 第3号, p.37.
- 23) *All Aboard*, p.35.
- 24) 同書, p.36.
- 25) 文中の表現は、treeまたはpine tree であるが、モリは“Interview with Toshio Mori”のなかで松の

盆栽と解説している。

26) *Trek* 第1号, p.24.

27) 同書, p.24.

参考文献

Topaz Times (Camp paper), 9/17/1942-8/31/45

『トパーズ時報』(『トパーズ新聞』) 10 / 29/1942~8/31/45

Report Division ed. *Trek*, December, 1942, February 1943, June 1943

Report Division ed. *All Aboard*, Spring, 1944

トパーズ消費組合, 『トパーズ消費組合二周年記念誌』

トパーズ収容所, ユタ, 1944年12月

秋谷, カール, 「神戸からユタ州トバズまでの道」, 『汎』第3号 (PMC 出版, 1986年), pp.120-165

Mori, Toshio, *Yokohama, California*, Univ. of Washington Press, Seattle, London, 1985 (1949年版の復刻)

— *Woman from Hiroshima*, Isthmus Press, San Francisco, 1978

Okubo, Mine, *Citizen 13660*, Arno Press, New York, 1978

The Asian American Anthology Committee, *Ayumi*, private publication, 1980

Uchida, Yoshiko, *Desert Exile*, Univ. of Washington Press, Seattle London, 1982,

—, *Journey Home*, Atheneum, New York, 1981

Ishimaru, Stone. *Concentration Camps-U.S.A.*, Tec Com Productions, Los Angeles, 1994

Horikoshi, Peter, "Interview with Toshio Mori", *Counterpoint* (UCLA Asian American Studies Center, Los Angeles, 1976) pp.472-479.

Summary

One of the Japanese American concentration camps of the World War II was Central Utah Relocation Center called Topaz. It was located at the end of the Sevier Desert in central Utah and about 8,000 evacuees from the San Francisco Bay Area were incarcerated there.

WRA newspaper *Topaz Times* was published both in English and Japanese. Some young Nisei (the second generation Americans of Japanese ancestry) who belonged to the WRA Project Report Division published literary and arts magazine *Trek* and *ALL Aboard*. Among the staffs were an outstanding writer and an artist, Tosio Mori and Mine Okubo.

Before the evacuation, Mori had been making effort to be a professional writer like William Saloyan, while working in his father's nursery in the daytime. He was about to publish his collection of short stories, but the war prevented him from doing so. Ironically free from nursery labor, he could be devoted to writing for the first time in his life in the camp. He wrote some short stories based on the Japanese American camp life and contributed them to these two magazines. It was in 1949 when Mori finally published his book, *Yokohama, California*, including his short stories written in the camp. He became a pioneer writer of the Japanese Americans. Rediscovered in so called Yellow Power Movement in 1970's, he then published *Woman from Hiroshima* and *The Chauvinist*.

Mine Okubo had already established reputation before the war and she also kept drawing scenes of the camps. After the war Okubo published a collection of drawings and essays, *Citizen 13660*, which was the first book by the Japanese American internee, well received by not only Japanese Americans but the other Americans.

In 1975 a Nisei Writers' Symposium was held in San Francisco which featured four Japanese American writers - Hiroshi Kashiwagi, Iwao Kawakami, Toshio Mori and Yoshiko Uchida. Three of them were interned in Topaz. The literary movement in Topaz influenced a lot on these Nisei and played an important role to encourage them to create their works.